汲古堂藏書目 六國史

858
89

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』 請求記号 858-89

ガラス使用

858-89

尾張細井氏記

三十卷　十五冊

○活板日本書紀

第二卷目次ニ

御本云本文畧之此序實文板ニ作千字卷目次ニ

第三十卷ノ末ニ

此鳴本者當初安貞二年兼賴校讎諸本正應之中神祇權大副卜部兼方筆之收于石室以永仁正四位下行神祇權大副兼山城守卜部兼夏轉書之云云于正安元甲辰沙彌蓮惠康永壬午神祇權大副兼俱轉書之云云于正安二庚子

頃內大臣實隆公以件本親賜書訂朱墨點今據內相公本鏤梓廣傳于世恐活板之徒多誤刁刀陶陰矣庶幾莫貽誚於金焉

慶長十五庚戌仲夏參八

洛汭野子三白誌

近藤守重撰ノ御本日記附註之內慶長勅板考ニ云

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89

ガラス使用

錦繡段一冊

跋

錦繡段者東皐天隱之所編而未有刊行茲取載籍文字錄一字於一梓基布諸一枚印一紙終改基布則渠祢亦莫不適用此規模此出朝鮮傳達　天聽乃依被様使之葺寫焉　叡恩尊在周周詩六義教化之家載人蔵傳之不朽云

慶長第二歳在丁酉夷則下澣　臣南禅霊三誌焉

守重云此活板部綴八寸四下横寸六分男行十七字字大方四寸許下ノ日本書紀署長恨哥皆此活板段ト刀ー謹按　朝廷活字勅板ノ権輿ナリ活字ノ始ハ文禄五年坊刻活字ノ蒙求ノ東見記。天子勅錦繡段板本賜五山僧永雄及古礀作詩奉謝之永雄云恩風高自楓震起分入僧衣錦繡織紅古礀云洛涯業最社賜之後要見坡翁錦繡才ト即此勅板ノ事也又細川家譜ニ　禁裏ヨリ　御劍（長恨哥）錦繡段　勸學文　拜領セシ旨見エタリ

跋

余工毎一梓錢二字基布之一枚此法出朝鮮甚無不便因茲摸寫此書

慶長二年八月下澣

守重云此活板巨部字行前ノ錦繡段ト全ク同シ又聞職原抄ノ活板アリトモ未ダ見ズ

日本書紀　神代卷二冊

跋

日本書紀歴代之古史也　道直云板本三アレハ以下畧之本書ニヨリクタノ考ノ

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

守重云此御校巨勢尺寸字數前ノ錦繍段ト全ク同シ唯草辺ニテ界行ヌキヲ異ト云此本神代記二冊而已義題ヲ以テ考ルニ是モト合部ヲ雕造セル(ヌキ)盛意アリテ改僅ニ此二巻ノ試印セラレシナルベシ校ニ好若日録ニ神代巻二冊俗傳テ勅ト称シ元亀帝ノ刻モメラトイヘリ正保帝ノ下鴨鴨脚某(恩賜)ノ本モ此御本ナリ今ニ其家ニ傳フ箋(ゲン)ハ元亀帝ノ宸翰ナリ守重云此墓本下ニ出ス此活字ヲ以テ印出ス乙医書アリ守重云此医書ハ陰虚本病稀ニ存ストイヘリ日録ニ俗傳ト(下ニ出ス一冊ナリ)アレド守重ヲ以テ是ヲ観ルニ國賢ノ跋ニ陛下金鳩ニ云云ト見エ慶長十五年五月洛内ニ三百ガ重刊刻ニ今坊刻ノ行本ハ此慶長校ニ訓点ヲ加ヘテ寛文九年ニ翻刻セル者ナリ件ノ國賢ノ跋ヲ載テ首行ニ御本ト題シ以勅本校行ト識シ乙則此勅校ノ事ヲ指セハ俗傳トイフベカラザルナリ慶長校日本紀ハモト古鈔本ヲ以テ活字シ其神代巻ハ此勅本ヲ以テ乙名ナリ故ニ其題ヲ乙処ハ本文ノ如シ三百ガ跋ニ道直云本ニハ金文已長前ニ云々ト乙悠ニハ其點ハ實隆公校訂ヲシニナリ又按ニ吉田龍(神)院梵舜日記ニ慶長四年四月廿日梵舜ヲ召ヨリ杉原十帖段子一端拝領也依ヲ進献アリニヤ

谷川士清カ日本紀通證例言ニ云至慶長年間活字本初行于世今坊間所行則係寛文重刻ニ河村秀根カ書紀集解ニ云有活字本慶長中所刻大抵与原本異有二三可取引以称活本ト尾崎雅嘉ノ群書一覧ニ云近来慶長年中ノ活板ノ本伝ハリテ世ニ多シ西三條実隆公点本ヲ以テ刊行セシ者ナリ日十三年後陽成院ノ勅旨ヲ以テ此時清原ノ國賢卿ニ校アリ同十六年ニ成ル

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

又実隆公ハ享禄ニ薨シ給ヒ重刊ノ事ハ
後ノ年世ヨ移リ化モ変リ此國賢卿トイフ舟橋環翠軒ノ當時
ヨリ今世ヨ移リ年ヲ寛文ノ重刻ニ至リテ誤字少ナカラヌ訓点ノ
誤殊ニ多シ一善本ヲ得テ校正スルニ至ラハ
平田篤胤ノ古史徴開題記ニ云日本書紀ヲ始メ校ヨ彫レルヲ
ミルニ後陽成院天皇ノ慶長四年トイヘル年ヨリ前ハ
ヤゴト此 天皇所思食ス一起テ少納言清原国賢ノ朝臣ヨ
詔命セラレテ此事ヲ創リ
慶長三年ニ豊臣秀吉公薨ジ給ヒテ其ノ関ケ原ノ軍ノ起キ其間ヲ
ヒ噪シクシテ年ヨ此事ノ成ラサリシヲ遺憾ニ思食シ
給ヒシヲ奉推ラセ給ヒテ何ノ暑文ヨ
私ノ国賢朝臣ノ家ノ蔵本ヲ善本ト
日本書紀歴代古史也ト道直云本書全文
ヲ以テ慶長ノ書紀ヲ始メ校ヨ彫リ弘ク世ヨ流布シ給ヒシハ天皇奉
ヲ所思食ス故物ニ於傍書ヨ以テ勅奉校訂ヲ以テスルノ
ヲ始メ此奉文ヨ借後世原本ニ之不審ヲ合セテ
学者儒佛者影ヲ知神書者鮮矣物有本末事有終始何ヲ本
取末ヲ舎ヲ之ヲ云ヒテ書紀ヲ市廛ニ坐ル叡慮ハ下ヲ下サセ玉ヒテ古道ヲ
本トシ学ンデ古ヘノ市学ヲ
よく文義ヲ心ヲ著テ知リ給ヒシ
ヲ聖叡高明ヲ
契ヒヲ皇大市國ノ生霊ヲ
萬ノ学ヲ
ノヲシ
テ此慶長ノ事ヲ其宣ヲ従ヒ
善ヲ二ヲ後悪キ所ヲ
予ハ徴ヲ傳ヲ
類聚国史ヲ
国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

引る文をし奥ちる文字ハ書入ら
本ハ近衛氏の古字本の闕本
北條氏ニ集の古本より引るみ
なを書入ら本を借りて書入ら本しるし

道直校ら尾崎雅嘉ら云近来慶長年中ニ活板の本ハ
世ニ行ハれ刊本ハ慶長四年ニ西洋三條実隆公ニ献ぜし刊行ニて
其保元二年の古本慶長三年
此清原國賢の跋ありて其本今世ニ行ハれ活板ニ道直所
蔵の活板日本紀ハ此本ニ又雅嘉云同十三年後陽成院の勅諚を
承りて又実隆公の奥書を以重刊ぜしハ道直云十三年後陽成院の勅旨を
後の本ハ世ニ行ハれ活板ニハ慶長四年ニハ又
承りてと云ふ何をもていそれや勅旨とハ慶長四年ニハ又
実隆公の点本を以て重刊ぜしハ國賢々の跋ニハ云々とハ云ふ事ハ
覚束なきなり近藤守重云慶長板日本紀ハ古勅本を以て
活字に其神代巻ハ此勅本を以て入ふるなりとハ実ニ確論と
いふべし道直云平田篤胤云此慶長四年の板本ハ次ニ云ふ所も
数多出ら残ら既ニ前ニも云ふごとく慶長四年ハ神代巻二冊ハ
活板なりて日本紀の全文を出ハ世ニ行ハれ活字ニハ其事前ニも論
ひりて云ふ事なり又二の活本といひ慶長十五
の事ハ誤りなり
年青洛洲子三百ら彫せ云々ハ活板ハ慶長十五
士階河村秀根ら見しハ此本と云ふ外ハきくと云ふ谷川
道直ハ云ふ古文孝経一冊ハ此本市本日記附注ハ出ら
後陽成天皇ハ勅旨の神代巻と同し活字ハ勅板ら縦八寸四
横五寸六分界行あり天地単辺左右双辺八行十七字ハ大き方ニ
寸斗とふら朝廷活字勅板ハ権重ハら以て高世の珍書ら
守重ら慶長勅板ハ以ふることく錦繍段勤学文神代巻二冊

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』 請求記号 858-89
ガラス使用

古文孝経ヲ其外四書長倉等ノ
守重ノ古文孝経ハ本ノ庸ヨリ
已亥刊行ト云

○活板日本書紀神代巻　上一巻 但下巻・二巻闕

此本慶長十五年正月開ル本ニ
ヨリ本凡十五枚ヲ初ハ行十七字ニ慶長本ハ初ハ行十八字ニ

○神代巻　二巻

跋ニ云
烏谷長庸嘗有志于神道信多年考索躰其趣講明大訓弘
澤世人其所蔵神代巻乎高祖太府國賢卿所校勅本校
刊者也此書世所通行訛謬不少長懼後世失其眞以所蔵本加
諸梓凡字異而訓同與字同而訓異句讀口傳一不失舊其信
上世之道之篤而考覈之勤豈可不嘉尚哉求予叙其後辞而
不獲為書刻成歳月以還之云
享保四年己酉臘月日

右清原国賢卿日本書紀の跋ヨリ
刻ス本ニ朱點ハ誰ノトモ
書林の名ヲ

○日本書紀　三十巻　十五冊

第一　奥書ヲ
第二　奥書ヲ

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

第三

奥書云

本云永正十一年五月六日書寫了

天文八壬六六書寫了

以累家之本書寫之畢 于時明應八年胃廿五日

從四位下行神祇權大副左兵衛佐卜部朝臣兼致

以件奥書之本加校合早 御判

天文九正廿一以一條殿之御本加校合之処朱点等有落字加之早

同九十廿一申刻 禁裏之御本加一校合了件御本逍遥院真筆也

私云以家本校合數度也

寛永三頃

第四 奥書ノ

龍玄

第五

建武五年五月十日 書寫点校了

永正十一年端午日書之

天文八年壬六十八書寫了御判

禁御本云

弘長元年九月三日書寫了移点同了

天文九十廿二以件御本加校合了

私云

累家以秘本朱墨点了

元三 三 廿二

龍玄判

第六

建武五年五月十四日交点畢

天文八七廿三書寫了

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』 請求記号 858-89

ガラス使用

弘長元年九月廿日書寫了同廿五日移点了
天文九十二以件御本校合了
私云七卷之点當家之正本之點也
次元三十二校合了
龍玄判

第七
本云建武五年五月十四日交点畢
弘長元年九月廿日書寫了同廿三日移点了
天文八七廿三
天文九十二以件御本校合了
私云七卷之点當家之正本之點也
次元三十二校合了
龍玄判

第八
私云兼右也
葬河内國惠我長野西陵云々武内宿祢收御骨上洛云々

貞和四年五月十三日七八兩卷讀進之
天文八九廿九書寫了 御判
弘長元年九月廿七日書寫了 同日移点了
天文九十二以件御本校合了
右以家本不違一字書寫了 兼右

第九
本
貞和五年正月十八日讀進平
神祇權大副卜部兼員
天文八十二廿四遂書寫之功了 御判
弘長元年壬十一月六日移点了天文九十二以禁中御本加校合了
右以家本不違一字書寫了同校合了
龍玄判

神祇大副兼員
天文九正十九以他本一校了

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』 請求記号 858-89
ガラス使用

次云筆主廿一日同廿五日書寫終也　龍玄

第十
本奥和奉九月廿日讀進畢　卜部兼員
天文九正八書寫了　御判
同九年正十九以一条殿御本令一校之処一字無相違者也
禁云弘長二年正月一日書寫了　同三日移点了
天文九年十一月三日　禁裏御本加校合了
右數本之御奥書本重而家本一字書寫了
四廿九書終　龍玄

第十一　奥書カ
第十二　奥書カ

第十三
建武五年八月十三日交点畢　老比丘御判
以卜部家本加書寫則又校合了　兼右在判
天文九三十七終書功了即以一条殿御本
家本校合之已

第十四
文明六年夏四月上旬命或人加書寫訖　老比丘御判
同中旬校合直朱墨点了
天文九四八書寫了以後成恩寺殿御奥書之御本加校合了　兼右御判
重而寛六頃及校合了　龍玄

第十五
本云建武五年八月十三日交点畢　御判　兼豊御判也

以卜部相傳本加書寫則又令校合了

以當家本與件御奥書御本加撥知令書寫了

天文九四廿三　兼右御判

第十六

重而寛六比校合畢　龍玄判

第十七

文明六年五月以卜部氏家本加書寫畢　老比丘御判

天文九四廿六累本与件御本令見合書寫了

重而及校合

寛七六　龍玄

第十七

文明六年季春廿一日於南都客舍以卜部三品

兼倶卿本校合畢　老比丘御判

天文九五三遂書寫了以件御奥書本与累家本見合者也

一条殿御本此巻外題神光院兼熙御筆也

重而校合以家本也

寛六頃　龍玄判

第十八

暦應元年十月十二日點早

文明六年三月下澣以卜部兼倶卿御本校合了　老比丘御判

天文九五六以累家本与件御奥書本見合令書寫之畢

一条殿御本此外題　蓮熙御筆也　卜部朝臣兼右

重而以家本一字不違見合了

寛六比　龍玄

第十九

卜部兼右

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89

ガラス使用

文明六年五月上旬以ト部氏秘本加書寫但文字誤等處々
改直所書也
同中旬加点早　　桃華　御判
天文九五十申請一条殿御本見合家本書寫之早
重而及校合作改如此也
寛六北　　龍玄判

第二十
曆應二年五月廿二日一交早
文明六年五月借申ト部家本命或人加書寫了則又校之
天文九年六月二日以件御奥書御本与家本見合之令書寫了　御判
重而以家本及校合了　　兼右
寛六頃　　龍玄判

第二十一　奥書ノ
第二十二
以ト部家本校之
天文九六十七以兩部之本見合之書寫了　御判
重而及校合
寛六頃　　龍玄判

第二十三
以ト氏校合不善者不從之
天文九年六月廿五日以累本見合一条殿之御本加書寫了　御判
ト部朝臣兼右
重而及校合了
寛六北　　龍玄判

第二十四

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』 請求記号 858-89
ガラス使用

宝徳三廿一点校早
文明六五晦重以卜氏本校之早　御判
天文九六廿九以一条殿御本与累家本加書寫早
重而以家本及校合尤證本也　卜部兼右
寛六頃

第二十五
永正十年四月廿八日書了
文明六年閏五月上旬以卜氏家本校合了御判
天文九年七月十八日以一條殿御本与累家本見合之如書寫了　龍玄判
重而以家本及校合了予撰見合　龍玄判
寛六頃

第二十六
本云
文明六年五月旬校合　卜部本記　御判
天文九年九月自二日至四日遂書寫之功早　兼右

第二十七
本云
移点了　兼賴
覆勘了見合了　兼有
校合了　建武二廿二廿五

曆應四年夏頃書寫移点了秋九月廿日校合了書本家秘蜜之
永正十年五月十八日書了　道遥院殿御判
一条殿御本御奥書云
文明六年閏五月上澣以卜部本校之　御判
天文九十三以累家本与一条殿之御本見合之書寫了兼右

第二十八
奥書列

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

第二十九

文明六年閏五月上旬以下氏本校合了　御判

天文九十八以家本見合件御奥書書寫了　華右判

私云　此巻見合不審多追而可及校合者也　龍玄判

元三卯十九

重而以家本及校合不審共也　龍玄判

寛六頃

第三十

延享四年丁卯夏四月廿二日校合了　度會常典敬識

奏未云

學者中有塙先生猶群籍中有日本書紀先生失明博聞強識冠于古今著書僅二千餘冊嘗留宿草堂野口道直携其所藏書紀来語其来由于先生先生

摸索數称曰書紀刻本數十種是為第一君宜珍重余在側記之時文政二年四月廿一日也　秦鼎印

塙検校保己一天下古書殆悉集君掌書類従既編集此尾張一本大須北古書又多孔子時秦滄浪先生方寓止尾張一本先生已書紀所蔵云本第一第二第三第四第五第六第七第八第九第十第十一第十二第十三第十四第十五第十六第十七第十八第十九第二十第二十一第二十二第二十三第二十四第二十五第二十六第二十七第二十八第二十九第三十

検校又従事家方北掲斯書紀乞以人々所有之本互相校讐庶幾乎大備焉其時已七検校亦老矣不能久存矣後学之士倘有所得而補正之則検校之志也先生傍在居而直其事業而書之以外之人会義解之而已其書之所以可貴也

文政二年四月廿日記

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89

ガラス使用

後陽成天皇
禁裏にて 御會ありて 近衛三藐院信尹公 北御筆 和漢聯句一巻 拝見 校合して 門人 なよまも
くやまし 此聯句世よ 珍重しきものの 九ヶ影寫 我宅
に 蔵置つ 此度編集 続群書類従 収全て
ものする 影寫ハ 甚多 ありしを 後続群書類従
若干 残念の事 の目録 抜萃して 生 加連歌の部 とす 御製ハ
慶長元年
後水尾院 御獨吟 和漢聯句 并 己 所持の
聯句 若干 天下の原本 なり 残念 なり
とも 海内 甲斐 多 其時場の物語 ハ 是 か
伊勢両宮 北 御文庫 とそ 〜 〜 〜

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』 請求記号 858-89

ガラス使用

講談所と建て学生を教授す蔵中古書二萬餘巻之内
名山古刹の秘蔵する古異書珍書秘籍ともいえ
ども世に伝わらざるを捜索して校刊し名つけて群書類従という
其書六百六十餘巻其功三十九年にしてはじめて集成せしという
後生其賜を受ること又かくのごとし於是続集千餘巻の事
書名つまびらかに目録を既に印行し世に布り吾邦古
来より大部の書物というべきものかくのごとし其右にいづるものなし
予かつて三國魏の雍劭傳より五經群書以類相從
いまだかつてあらざるをうれえ其著述
ありてよりて名つけ
るの書 椒庭譜畧 螢蠋抄 花咲爺
校刻するものの 日本後紀 令義解 百練抄 類聚
符宣抄 徒然草 和歌
あつめ總隠集という或人其書名を
いぶかり深き意あらんや總校の隠者共集というそれ
にもあらず或時吉方にて水
講説せんとし所にて校合する事ありしかども涼風吹きたるやいなや
待つれども校合の消ることなし
ときに何故ぞと問ひしに校合の消えてなきをいう
まで待せたまえとそたるゆえ校合
不自由なるものかと戯れいえば
しとやかに號を水母子という二六水母(クラゲ)の目を借るという
諺より出ずる水母以鰕為目という越絶書 廣韻 楞嚴
經などにあり 猶林下偶談 農田餘話 説文 又五月者
は捉蛟の誕生日なれば或人云五月五日はまさに子の親まさる

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』 請求記号 858-89
ガラス使用

とふるし昔よりの俗ぶみを撿校のあげ奥ての孫北栄とし
て古来北俗説を砂るよしなり因ふ云々青玉
生子ありる史記孟嘗君は青玉生ニ五月子者長ケ与
戸齊將不利其父母ニ害母ニ云々五月生子男害父母女害母也と大鏡東書ニ云
俗説五月五日生子男害父母云々
物ふるふるふる

和漢年契 十冊

天明初年群書類従刻成一千二百七十三部六百三十五冊東都塙
檢校保己一輯 本邦古来著書之廣大貞主秘府略一千巻
後無及此擧者實可謂大業也
青柳文蔵茂朗 九續諸家人物志 十冊
塙檢校
名保己一水母子与云江戸人幼ヨリ明ノ喪ニ自ラ讀誦ス
事ヲ好ト雖天資強記ニテ一度聽テ誦スルナス者冠ノ頃ヨリシテ
專ラ和哥ヲ志シ吟詠ノ事ヨリ文典諸學ノ講究ニ我中世
ノ事實ニ於テ通暁セル事ヲ以テ遂ニ保元以降諸家ノ記録雜書
ノ永湮没シテ世ニ顯レザルノ嘆ニ海内ノ捜索シテヒレヲ校訂
シテ上木スノ總テ一千二百七十三種六百三十五冊其ノ勤勞スル
カラスト謂ヘシ各書ニ十類ヲ以テ彙編スル故ニ群書類從ト名ク數
百年来先儒ノ著書曠世ニ廢棄シテ知者カラシモノモ
ヒニ依テ傳ヘ不朽ト九事誠ニ大功ト謂フヘシ晩年ニ至テ官ヨリ
費給ヲ久シクシ弦以テ逸書ヲ收藏セシトヲ文政四年九月
十二日卒歳七十六

總陵集

著述 螢燭抄 花咲考 他ノ云

件信友の上古姿衣考朝世紀考の如きハ聲者職檢校塙保己一の公撰
なりしかとそのさることを知れる人鮮なし
ときこゆる史料の首字多天皇
醍醐天皇共御世ノ事記ヲ得テ
ノ具御世ノ係ルヲ以テ紀年日次ヲ書載リ
醍醐両天皇ノ記十六巻乃至
牛久天皇ノ記十六巻乃至
ヲ引掲ノテ
ノ如ク考定ノ明確ヲ

はんせるをいふ（ママ）多くあるべき大人ことごとくかくれ
紀書寛文九己酉年正月吉辰　武村市兵衛昌常
村上勘兵衛元信
山本平左衛門常知
八尾甚四郎友春

と記る普通の本なり道直翁ものせる日本書紀の延享
四年丁卯夏四月木下肥後守なる校合せられし一度會常典の伊勢の
神宮ご寄屬五乙亥の年春正月久志本外記度會常典識
と記る板本哥井山かはらの序ありこの序は云
屬て前のなんぢの天ともたのみ
ものこと、二神よ此国 書紀の延享
今打世よりまでを心を用ひ給ひしの詞なり心詞凡猶の倫

〇日

かくるをもし詞よりてこそ見しらめ其詞のくだ
うるはしきはまことあきらかにいにしへ此世に此先達正本の
かはらぬをこそ統ぬ先きの意なれ
我書をこそ統ぬそのて無加霊社のこと統たりなる久しき日夜
の血脈絶うけしもし此時道一冊を徹田
心をこめ作るよりこれ種玉屋主
英鎮氏の許よりて菴主なりて東野州今尾藩
事れ史へくして二條家お家師る小具人書
ひとたにたれをや且其事れ史もし日記そ
おかたる多し事ども書ける誠ニ此道ニ入ん人の
一助をもなり作んうれしきをもて
今梓もちそそ勢州山かはれいもこと

道直云々托也考之家祇陸奥を信しはるゝ今の
校合をもて本を校するに再山の傳ふるそれ
ま其人ならそうきはもてるみなそ安
なり

○日本書紀　三十巻　合本八本
神代巻のほかそ荷田在満蔵書
以裁訂之荷田東丸在元以緒訂之契沖朱点本居宣長
と付す其朱墨まそ諸註そ
第三の初ま宝暦九年己卯三月起筆ととして奥書あり
第四奥書なし
荷田東満手自之書
第五奥書なし　第六至第二十五同

第二十六　元和十年　宮内省以他本再校一
第二十七　本云　校点ナ　兼頼
覆勘一見合一　校合一　建武三年十二月五
暦應四年夏頃書寫校点一　秋九月校合一
書本家秘密之本也　永正十年五月十八日書一　御判
元和二九廿日朱墨点一　同十年正月七日以他本再校

第二十八
安貞二年八月三日點一一　神祇權少副卜部兼頼
即覆勘一
永仁五年四月一日見合　雍州刺史卜部方
校合一　建武二十二年　同十年二月九日
永正十年六月三日書寫一　前槐御判
元和二九廿三朱墨点一　以他本再校一

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

第千九　奥書ノ一

第二十

延享丙寅三年八月以鼎君恵王父正好之所藏本訂校
度會正身

文化甲子元年秋七月中幹以宇治五十槻藏書校合本寫焉
同八月四日朝寫畢　加藤肅敬子

文化十四年丁丑夏四月晦日讀
加藤肅

日本書紀　自神代至持統天皇紀三十卷荷田東滿荷田在滿手
老訂之書而校合焉宝暦十年庚辰秋八月藤原宇万伎

道直称云卅奥書ハ上田秋成ナリ
安永四年乙未浪華ノ寓ニテ　契沖法師ノ手沢ヲ獲テ
モノカラ　ナホカラカ　アラモホシカラカ　ノ
ホンノキ　ニヲヲシメ
ヲヲシキ　ニヲヲシメ

道直云上田秋成ノ著セル　印本文及吾妻中ニ
一日本紀契沖ノ考ヘ　ヲ　ヲヲシメ

法ノ如キ書ヲモ　ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ　ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ吾
書ヲモ　ヲヲシメ　ノモノ　ト　ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ乃チ今奥書ヲ
モ　ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ安永四年乙未浪華ノ寓ニテ
文　古　ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ上田秋成ノ寓ヲカ　ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ書ヲ
ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ　ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ　ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ
ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ　ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ　ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ
書ヲモ　ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ　ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ　ヲヲシメ　ノ如キ書ヲモ

古事記を寛永二十年北村
季吟の校(平)にて彫(ほり)たる本を
本として師の古訓本と三ツの中の古訓
一てうとして
予が本も古訓本ゆゑ寛永古版本を
漏(もら)したる文字ども校(かう)
多き福寺とある寺北本ゆゑ借(かり)
うつしたるものゆゑ脱字
しを三巻ともに校合(かうごう)
これ福寺ハ師し
のかりたる其元本
本を下巻ともに建治四年仲春
奥書(おくがき)ありく(ママ)
建治四年ハ弘安元年(げんねん)
後(のち)なれども用(もち)ゐたる
ゆゑ実(まこと)に傳(つた)への物(もの)
討(うち)たる本の古事記を尾張名古屋
年岡田啓中尾義稲(よしいね)
七ツ一冊此古事記と
くまりたる古事記のもの
古事記下
本云 文永三年二月仲旬書寫(しょしゃ)畢(をはんぬ)
日六年九月廿九日於燈下一見畢 神祇大副大中臣定世(さだよ)
建治四年仲春廿七日彼岸中日 判
又一見畢 若執(とる)至校在永事(ながことを)
判

借請親忠朝臣一本在田大納言家所書別ある
依家若侍帰命書写進早又一本書写之
とある影写ハ別よる
慶安年僧賢瑜書写
道直岡田挺之九持来
古事記　三帖とあり
古事記序
夫
皇朝載籍莫古於古事記古事記者和銅中太朝臣安萬呂詔
録稗田阿禮所誦舊聞也起自天地剖判迄
推古天皇奉為三巻歴数十年前
帝統皇猷典章事蹟猶可概見者古事記是頼可不尚乎
其他牲牒奇紀湮没不傳者蓋亦多矣獨是書至今完全者有神
明護持之也但坊間刻本無無訛舛
寺有舊寫古事記世所罕見最為佳本臣稽首通拜就而讀之如
蔑拱壁請繕寫參校而後繍梓置諸明倫堂以廣其傳
命依所請是本韜晦多年紀今始表見亦有數而然邪於是命臣
挺之序其巻端茶惟吾
公被服儒術修學好古遠與河間秉幸同風先是使諸儒校摩書
泊要刊行四方復鐫是本嘉憲於世伯孝之士孰不受其賜哉臣
挺之生遭清時謬荷
恩華得覩景盛臣岡田挺之拝撰謹書顛末如此
寛政九年冬十月
本居宣長北古事記傳ニ云此記今世ニ所布セルハ二巻ニシテ寛永
ノ頃板ニ彫リシモノニテ字ニ脱タル誤リ多クシテ文理ノ通ラザル所多ク
誤ヲ正ス度重ナレドモ古本ノ如クニハ成ガタシ△伊勢ノ神宮ニ有ル度会延佳ノ古事
蓋有脱文

校く改ゟ能やうに訂正を加ふ
ことそうやまつゝしみまもるべきものなり
くほ〳〵宝をひろめんとさゝやかに
宝をあきなひおもふらんてふ又宮
もる古来そのまゝにうつし弥守る
其長尾張の名護屋ゟ真福寺と
を寄もる秘本をかしこ八篇の本しるしきるまし
ゟ引くはゟる校字此ゟる誤ゟ多
○續日本紀　四十巻　記一本　合本十本
第一　奥書ゟ云
寿永三年正十二年閏二月二日書之
元和八壬戌年仲夏以實蔭公自筆本寿ゟ。同加句讀

第二　安永九年正月廿六日校訂了　西山期遠子
第三　奥書ゟ　宇治平槻久老
第四　安永九年閏正月廿五日ゟみ改　久於喬
第五　奥書ゟ　久老
第六　安永九年正月廿九ゟみ改
第七　奥書ゟ　宇治久老
第八　安永九年二月二日讀合了　久老
第九　二月二ゟ讀合了
第十　二月四ゟ校訂了
第十一　奥書ゟ　久老
第十二　日
第十三　安永九年二月十二ゟ讀合了
第十四　奥書ゟ
第十五　安永九年二月十四ゟ讀合了
第十六
第十七　奥書ゟ

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

第六　安永九年二月十五日ヨリ十五人ヲ以テ
第七　奥書ノ
第十　安永九年二月七日讀合了
第十一　奥書ノ
第十二　安永九年二月十九日讀了　久老
第十三　奥書ノ
第十四　安永九年二月廿日讀合了　久老
第十五　奥書ノ
第十六　安永九年二月廿六日讀了　千治久老
第十七　奥書ノ
第十八　安永九年二月廿五日讀合了　久老
第十九　奥書ノ
第二十　安永九年二月廿七日讀合了　非料憶喩
第二十一　奥書ノ
第二十二　安永九年二月廿六日讀了　宇遠幸槻久老
第二十三　安永九年二月廿九日讀合了　皆而而是矣
文化十四年五月十七日句讀　庸
加藤肅　今晴天暑氣ヲ
雖勉強用ニ
之ヲ理ス

第二十三　文化十四年夏五月十七日以須臾
第二十四　安永九年二月略ス
第二十五　奥書ノ
第二十六　安永九年　春三月朔校訂畢
第二十七　奥書ノ
第二十八　安永九年三月上旬後一日於
文化十四年五月十九日於梅軒句讀
第二十九　文化十四年　五月十九日句讀午時過而遠雷大雨須臾而晴天
第四十　安永九年自正月廿六日
至三月廿日　以古寫本校訂畢
皇天神宮　権祝宜從五位上菜木田神主久老
文化元年甲子冬十月上幹　以平槻校訂本校合畢
文化二年乙丑三月晦以本居宣長著
文化十四年五月廿日句讀
道直按ニ此ノ柴ノ葉ノ挍合ノ事ハ其ノ子ノ書ヲ後ノ加藤肅ノ
又書入ニ

加藤肅敬子　久老
加藤肅　久老
宇治平槻　久老
加藤肅敬子
加藤肅
加藤肅

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89

ガラス使用

17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53

金

鍊

慶長十九年八月十九日 聖唯心　大納言輝資
唯心院
侍中群要抄十巻ヲ
大御所ニ献ス是金澤文庫ノ書ニテ
書ナリト創業録ニ出
齊民要術　巻ノ巻外十巻書名ハ
李云　貞治二年癸卯ノ古本 幸園自序学事傳取之
仁安元年九月晦於石淵寺以唐
仁安元年一校了 四十月廿七日又校了
典薬権助和気雅
以唐本一部十巻山川僧正唐本勘本書了
件書一部十巻山川僧正房自家坊令借下本
移点書写校合
于時文永十年壬酉七月
右ノ少シモ金澤文庫ノ印アリ
朝野別刺史 在判

續日本紀考證例言
一六史日本書紀為第一而此書次之書紀昔賢而下講究不置
又有訓法以裨益後学他史則寥乎無聞豈不一大闕典哉此
書明暦中平安人 立野春節鋟梓行世而文字脱誤未及是正
讀者惜焉元融不佞好讀史最深致意於此書潜研反覆有年
于茲乃不自揣取數本參互校讎更錯引舊聞作考證十二巻
其疑義難暁者姑闕之不敢臆決也嗟以謗陋蠡測深奥而訛
謬之多極知貽人笑博考君子幸教之
一此書編修所由詳見延暦十二年八月藤原継縄公上表見類
史文及十六年二月菅野真道朝臣上表見日本後紀及今並
附録巻首以便観覧謹案継縄公上表云故中納言從三位兼
行兵部卿石川朝臣名足主計頭從五位下上毛野公大川等

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』 請求記号 858-89
ガラス使用

奉詔編輯、真道朝臣上表（亦云前朝詔故中納言從三位兼刑部大輔侍従五位下淡海真人三船、石川朝臣名足、刑部卿從四位下淡海真人三船、永嗣等分帙修撰云、）乃知撰史之實權輿于此、而其大成則在継繩真道二君矣、又案釋日本紀四十卷、菅野朝臣真道等撰、（抄同）而不屬之於継繩公、然此書自文武天皇元年至孝謙天皇天平寶字元年至桓武天皇延暦十年大尾二十卷、継繩公所撰、（案上表云十四卷、蓋継繩公當時所上、實十四卷、而其自寶龜末至延暦十年大尾六卷乃後日追書所類上也、其前後総裁、（宗帝天平宝字二年）固不同而非成於一手者、則二君上表及本書毎卷首所題署、而可知矣、蓋継繩公薨時、其書有尾未備、真道朝臣獨能竣修成之功、故釋紀書目係諸一人與撰延暦十六年二月宣命、亦為四十卷、真道朝臣所奏進、宣命見日本後紀、皆大槩言之耳、（載在附録宜并考）一類聚國史載継繩公上表、祇稱曰國史、不著書名者、蓋當時

慶帝以後紀方脫草稿而首尾未備、故續日本紀之名、至真道朝臣上奏時而定也、

一此編校正所據凡有六本、一曰卜本、卷末皆書延文及應永應長等數字、又載卜部兼豊及兼煕、兼敦兼夏等卜跋、乃卜部氏歷世所傳也、二曰永正本、亦出於卜部氏、卷末所署與卜本相似、而最後載永正十二年老槐散木識語、老槐散木蓋西三條實隆公別號、據古本文德三代實録及水鏡跋文、則是實隆公借卜部氏傳本所寫也、三曰金澤本、舊係金澤文庫中所收、余幸得借覽其影鈔本、此本自首卷至第十卷、與後三十卷、筆意不同、前十卷、蓋後人所補寫、第十一卷以下每卷首末捺黑文金澤文庫印、卓様奇古、書蹟亦足愛翫、影鈔猶爾、原本之美可想已、四曰宮本、係伊勢國山田鄉豊宮崎文庫藏、承應年間文庫書生勠力謄寫、以

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

以所納者見跋尾五曰鴨本卷末無識語未詳原本所由疑其出於鴨氏也六曰堀本吾口口公賜蠹書院所藏舊舊出於平安堀氏每卷首印平安堀氏時習齋藏八字卷末載寛永十四年等字及識語其下捺重圈印文曰杏菴案杏菴堀氏名正意時習齋其曾孫正修別號也以上六本余別著續紀諸本考詳論之此不贅

一 此書往往用六朝唐代俗訛字樣綱作綱鬱作鬱牢作牢開作開之類見玉篇廣韻正字通五經文字千祿字書等岐作歧纏作纏薩作薩澁作澁攝作攝尤作冗之類古鈔本佛典多用此

藏經音義隨函録龍龕手鑑亦載之固可以見其皆有所出而非此間杜撰矣其他可異字樣散見各頁可知者攷證之不知者闕焉又有借用音近畫少字者辨作弁釋作尺鞭作挺變作及之類是也有省偏旁而用之者伎作支健作建餘作余村作寸之類是也有合二字而為一者麻呂作麿日下作昇之類是也有與彼同字而異義者梓椅槻倭棕等字是也並見日本紀古事紀萬葉集諸書蓋古人多用之讀者不可不知

一 考證取諸家之說例必著名氏不沒其所自而紀中宣命文有本居鈴屋先生歷朝詔詞解精確破艱澁故今不復別為之注釋讀者宜就而考焉然行文脫語辭不成義要難欠是正者多引詔詞解以為說仍不復著其名以省煩重也

一 余初讀此書苦多脫誤望洋乎殆無所措手矣嘗借內藤氏廣

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

前及山崎氏知雄本校之頗多所裨益山崎氏本以狩谷掖齋
先生手澤校本寫之觀上層及行間旁記蓋當時平氏高潔源
氏義忠諸人與先生相俱比校援引古書以資攷據者而先生
之說居多焉但草率訛書或不及題名今無可辨識者間或有
之余作考證多取諸此而亦不著其名者雖迸涉雷同實不得
已也內藤氏著姓氏錄考證國史人名考山崎氏作日本紀畧
定本並篤學精古余切劘之友也
弘化二年乙巳秋九月

寫本二十卷二十本合本三本

村尾元融識

○日本後記
道直藏古寫本卅卷缺第十一之
奧書曰云

右二冊者安永七年使門下小生波根雅滿都牟自朝風弟正均等
以謄寫畢始自九月二十七日迄于十月二日業終焉
同年十月檮日本逸史校正畢

宇治弄槻久藏
波根雅熊
都牟自朝飛
度會正均

文化元年甲子冬十月當借弄槻藏書本校合畢

尾張氏・加藤肅敬子

文化五年戊辰秋八月二日借訓點本藏書家校合畢 肅

○續日本後紀
道直所藏之本奧書曰天和乙亥初夏河村家藏の

為書印方印ヲ押ス秀根ノ自筆ニ生ス
第一　安永八年酉十二日始業　宇治孝槻　荒木田神主久老
第二　奥書ノ
第三　八月廿四日讀了　久老
第四　八月十五日校訂了　久老
限リ有キ　皇御國ハ久ナカラ
今モ有ケル日ヲ数ヘツヽ
モモヨロヅノ事ヲ記シツヽ
カヽル日記ヲ見ルモ
第五　奥書ノ
第六　八月廿七日校訂了　荒木田神主久老
第七　八月廿七日校讀畢　久老
第八　八月廿九日校讀畢　久老
第九　八月廿九日ノ今日ヲ以テ校了ス　荒木田神主久老
第十　八月廿九日讀了　非在於喩
第十一　八月廿三日校畢　荒木田神主久老
第十二　御祈参勤之後校訓了

第十三　安永八年八月廿四日一過了　荒木田權神主宇治五十槻久老
第十四　八月廿五日御祈参勤之後校訓一過了　久老
第十五　八月廿九日ノ今日御祈滿願也参勤之後校合了　荒木田神主久老
第十六　安永八年九月朔校訂一過了　荒木田神主宇治齋久老
第十七　安永八年九月三日校訂ス　日佐於喩　久老
第十八　右二十冊以宮崎文庫本中西信慶本印本之三本校合一過了　久老
第十九　于時安永八年八月十三日終于同九月二日焉
皇太神宮權祢宜從五位上
荒木田神主宇治孝槻久老

文化元年甲子冬十月上幹借五十槻久老蔵書校合
文化十四年丁丑夏五月廿九日於樹軒勾讀　加藤肅敬
此奉河村秀根蔵書以某校合
後為視易今五十槻校訂以墨書此本焉　加藤肅

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

道直按ニ續日本後記實文八年庚申孟冬穀旦立野春節識
と跋あり此本共ニ別板ニて
書林の名なし　洛陽小川林和泉掾と有
近衛守重の御本日記附箋ニ
續日本後紀十冊　三條大納言
按ニ本光日記慶長十九年十月廿四日の條ニ
洋ニ此本の事ニ見ゆ今為基而ニ有之
天文二十六廿日辛馳筆と有ハ現在の一本ハ其事ニ
大治元年保延二年　天文三年
禁中書寮ニ所燈下統書仲子今為基而ニ有之
實録の奥書ニ據れハ此天文の跋ハ實隆公の
其他又一本有り　以上三本未見ニ付よ

禁裏ニ所ニ有之ハ此本ニ
家ニ有之ニ

○文德實録　十卷　合本二本

道直按ニ安ニ河村秀根の抄書ニて卷初ニ河村家之
印あり此秀根自筆ニ朱書ニて校合ニ秀根校ニ
第一　一本奥書
永正十三年七月廿六日以兼滿朝臣本書之病懶之走筆可耻之　前槻判
文化十四年丑夏青廿九日於梅樹軒句讀　加藤肅
安永八年四月廿一日以文庫本校合　久老
第二
延文元年丙申六月日修補之正四位上行神祇大副卜部兼豊
永正十三年八月廿日書寫了　判
文化十四年丁丑青月廿九日於梅樹軒句讀　尾張加藤肅
第三
本云
延久元年丙申六月修補之
正四位上行神祇大副卜部兼豊

李云
寛長二年三月十九日抄出了正四位下行神祇権大副卜部宿禰兼夏
安永八年閏廿四日よりかゝり
文化十四年丁丑五月廿九日句讀
加藤肅 久老

第四 李云
安貞三正十九書校了
抄了孟夏
延文元丙申六月修補之 正四位上行神祇大副卜部兼豊
永正十一四三
永正十二年八月九日書寫了
安永八年閏廿四日かゝり
文化十四年五月廿九日句讀
神祇大副兼敦
判 久老 加藤肅

第五 李云
安貞三年二月於燈下書校畢
正和元年三月廿一日抄出了
一見了
延元元年六月日修補之 正四位上行神祇大副卜部兼豊
永正十二年八月十三日書寫了
文化十四年丁丑五月廿九日薄暮句讀畢
尾張國人加藤肅
正儀大夫卜判
通議大夫卜判 兼夏
兼敦
老槻散人判

第六 延文元年丙申六月日修補之正四位上行神祇大副卜部兼豊
永正十二年廿四日了
安永八年閏廿四日午時ゟかゝり
文化十四年六月朔日句讀ゟ
久老
肅

第七 奥書ゟ
第八 延文元年丙申六月日修補之正四位上行神祇大副卜部兼豊
永正十二八九了

第九 延文元年丙申六月日修補之正四位上行神祇大副卜部兼豊
永正十二年八月十八日修功了
安永八年ゟかゝり
文化十四年五月ゟよりかゝり
久老
加藤肅

第十 書校了
七月廿六日第一巻ゟ之六日終一部功也
永正十二年八月十八日終書寫功了
槻陰山人虚子判
安永八年春月八日以宮崎文庫之本慶安四年寫本校了
宇治五十槻久老
加藤肅敬子

文化十四年丁丑夏六月朔日句讀

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

元禄十三庚辰年
卯月吉旦

堀井傳右衛門
上村四郎兵衛
藏板

文徳實録二板あり一板巻事ヲ省寶永六丑季春吉辰
御書物屋 雲寺和泉掾ト
天明八申歳燒失 寛政八辰歳校訂 新彫 元章
道直按元禄板ノ誤ヲ正シ本文ヲ長門ヲ以テ頭書ヲ
ヲ予ハ元禄板ヲ校合セシ為ナリ
近藤守重御本日記附注ニ云
文徳実録 五冊 廣橋大納言
按ニ本者日記六月廿七日ノ條ニ載ルモノ
廣橋ノ兼勝卿ヲ以テ本ヲ安貞三年正儀ヲ先判

正和元年 通俊大夫ヲ御判
又一見了兼夏兼豊兼敦トアリ永正十三年六月廿五日ノ綸書ニ
老槻散木 御判 又槻陰逃處子 御判ト識セル現存ノ一本
アリ其事ヲ永正十二年七月廿六日ノ綸書ニ御判ト識セル現存ノ一本
判トアリ又慶長元暦脱天有老ノ字ヲ脱セル兼満朝臣本書之前槻
十三行有文字ノ九字也今當改行為十行文字ヲ慶長三ノ
九月廿日丹山陵ヲ修ス
其他校訂ヲ加ヘタル
尾張雅ノ群書攷ヨ寶永六年ニ刊行セル
道直ノ校ヲ元禄十三年ヨ刻セル本ヲ見ルニ
少シ附ケ加ヘ改正ヲ為シテ

○三代實録

道真朝臣等奉勅撰進

為書印二押てる方印の白字し廿人の自筆校合あり

第一北本の奥ま云

安永九年以神村氏本校雠即元本吾子有子之遺書有類聚日本紀校也後舊鄉以慶長古寫講習堂本更校定也今以類記講本字標之以便分別云

本有一時代不知古牒寫殊勝書也今存講習寸雲時習五六本

邊卷之號皆堀氏之別號也

同卷末ま云

安永二年三月二十三日皇都校合終　忠貞

以神村舊鄉本校且加意見了　通邦

第二

安永九年四月七日通邦

安永二年春三月二十六日於皇都堺町藝州儒臣堀氏校雠終

尾張處士神村信九郎忠貞

安永九年四月八日以神村舊鄉校本雠對校了　稲葉通邦

寛政六年甲寅正月廿四日　類聚日本紀一校合　通故

文政八酉四月一校畢

第三

安永二年三月二十七日於皇都堺町堀氏校合終　神村忠貞

安永九年四月八日以神村舊鄉校本雠對校正了　稲葉通邦

寛政六年甲寅正月廿四日　類聚日本紀一校合　通故

文政八酉四月一校畢

第四

安永二年三月二十九日於皇都堺町御門下堀氏校雠是堀元祖藝州左京兆儒臣堀昌易法眼所持書也判號講習堂　神村忠貞

安永九年四月九日以神村舊鄉本雠對了　稲葉通邦

寛政六年甲寅二月十七日類聚日本紀一校合了　通故

文政八酉四月校合了　通故

第五

安永二年三月二十九日夜三更校合終　忠貞

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』 請求記号 858-89

ガラス使用

九年四月十日以舊卿本雠言對

第六
安永二年三月晉閏月稽日校雠言終
九年四月十日以神村舊卿本校了 忠貞 通邦
寛政六年甲寅二月廿九日類聚日本紀一校畢 通故
文政八酉四月御本校合畢 通邦

第七
安永九年以舊卿本校合 通邦
四月十一日
文政八酉四月校畢

第八
講習堂奥書云
慶長十五年庚戌二月下浣菊亭大臣講談之時拜借瑶翠
軒宣賢卿之校本寫之
醫士正意 廿六歳
安永二年閏三月二日以藝州儒臣堀正意法眼所持之書校雠終
九年四月十二日以舊卿本雠對 神村忠貞 通邦 通故
寛政六年寅三月十日類聚日本紀一校了

文政八酉御本一校畢

第九
安永二年閏月四日以堀昌意所持之書校雠終 忠貞 通邦
九年四月十三日以舊卿本校了

第十
安永二年閏三月四日以昌意法眼所持之書校雠終 忠貞 通邦
九年四月十日以舊卿本校本雠對終

第十一
安永二年閏月十八日午時校雠終藝州儒臣昌意法眼
奥書云
以菊亭右大臣公之御本寫終于時慶長十五年春二月 神村忠貞 通邦 通故
九年四月十三日以神村舊卿本校合了
寛政六年甲寅三月廿日類聚日本紀校合了

第十二
安永二年閏三月七日午前校雠終藝州儒臣堀昌意法眼所持
書也奥書云慶長十五年庚戌春三月
以菊亭右府御本書云

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

同六月十九日再校終称古本者時習齋藏書也

九年四月十四日以神村舊鄉本校讀了　尾張處士神村信九郎忠貞

寛政六年甲寅三月廿七日類聚日本紀一校了　稲葉通邦

文政八酉四月十二日校合畢　通故

第十三

安永二年閏三月八日於皇都堺町御門前堀氏校合堀講習堂

昌意法眼所持也慶長十五年春三月拜借菊亭左大臣家之御本

同六月十有五日以時習堂古本再校終　神村忠貞

九年四月十五日以舊鄉本校終　通邦

寛政六年甲寅四月四日類聚日本紀一校了　通故

文政八酉正月十二日校了

第十四　奥書ヲ

第十五

安永九年六月十三日一校了子有子所校也　通邦

寛政六年甲寅四月十四日類聚日本紀一校合了　通故

第十六

安永二年閏三月八日以堀昌意法眼所持書校讀終卷左古寫書是

九年四月十六日以舊鄉本校讀了　忠貞

第十七　通邦

安永九年四月十六日以舊鄉本校讀了　通故

寛政六年甲寅四月廿二日類聚日本紀校合了

文政八酉四月訂畢

第十八

安永九年四月十七日以舊鄉本校讀但堀氏藏本脫此卷故無

舊鄉所校者徒有吾子之手而已　稲葉通邦

文政八酉四月御本校正畢　通故

第十九

安永九年四月十七日以舊鄉本校了　子有子之校本也　通邦

第二十

安永二年閏三月九日校讀終　称古本者講習堂堀正意法眼

家藏書也自十四至十九脫卷古賸寫本殊勝書也　神村忠貞

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』 請求記号 858-89

ガラス使用

九年四月十七日校雠了

第二十一
安永二年閏三月晦日以堀昌喜法眼所持之書校雠畢
九年四月十八日以舊卿本校了　神村忠貞　通邦
寛政五年癸丑九月八日御本日本紀畧一校了　通故
同六年甲寅五月八日類聚日本紀一校合了　通邦

第二十二
安永二年閏三月十四日以講習堂古本校雠終　走貞
九年四月十九日以舊卿本校雠了　通邦

第二十三
安永二年閏三月十五日以講習堂昌意法眼所持之書校雠終
奥書云慶長十五年春三月拜借菊亭右大臣家藏本書功終
九年四月十九日以舊卿本校了　神村忠貞
通邦

第二十四
安永二年六月二十日校雠了　秘古者藝州儒臣講習堂堀昌意
法眼所持書也寛永年中菊亭右大臣家之本南寫終云　走貞

大年四月十九日以舊卿本校了

第二十五
安永二年六月二十有三日以時習齋古本儀定終　走貞
九年四月二十日以舊卿本校雠畢一校了　通邦
寛政五癸丑年九月十二日　御本日本紀一校合了　通故
六年寅五月十九日　類聚日本紀一校了　通邦
文政八酉四月御本一校訂畢

第二十六
安永二年九月二日以藝州侯儒醫堀昌意法眼之古本
校雠終前本者菊亭右大臣家之御本云　神村忠貞

第二十七
安永二年九月三日以藝州醫臣堀昌意法眼之藏書校雠終
古本奥書云菊亭右大臣拜借寫之云云　神村忠貞
九年四月二十日校了　通邦
文政八酉四月十五日御本校合了　通故

第二十八
安永二年九月六日以菊亭右府公御本所貸寫本校雠了

寛政五年癸丑九月廿一日御本日本紀畧一校合了　神村忠貞
同六年甲寅春月廿七日類聚日本紀一校合了　通故
文政八酉四月十五日御本校合畢

第二十九
安永九子四月廿日校雙了但此本吾師之手而已蓋慶長本脫也　通邦
寛政五癸丑九月廿二日御本紀畧一校合了　通故

第三十
安永九年四月二十二日以吾子有子本校了舊鄉校閱　通邦

第三十一
安永二年九月七日以堀昌意法眼所持之本校雙了終　称古本者是也奥書云慶長十五年拜借菊亭右大臣家御本寫之
寛政六年甲寅六月類聚日本紀校合了　神村忠貞　通邦　通故

第三十二
安永二年九月八日以藝洲儒官堀昌意法眼所持之書校雙了終　称古本者是也奥書云以菊亭右大臣家之御本慶長十五年寫終云々
先考神村岐山先生嘗校正此本其所校者即
敬公所撰之類聚三代實録也
九年四月二十二日以舊鄉本重校了　神村忠貞

第三十三
安永二年九月十七日以堀昌意法眼古本校雙了　忠貞
九年四月二十三日以舊鄉本校訖　通邦　通故
文政八酉四月十一日御本一校訂畢

第三十四
安永二年九月十八日堀昌意法眼古寫本校雙了　忠貞
古本奥書云慶長十五年以菊亭右大臣家之御本寫之　通邦
九年四月廿三日以舊鄉本校雙了終　通故
寛政六年甲寅六月十八日
御本類聚日本紀一校合了
文政八酉四月十七日一校合了

第三十五
安永二年九月十九日以堀昌意古本校雙了終　忠貞

九年冒二十四日校了

第三十六
安永二年九月二十七日夜以昌意法眼之古寫本校讎系 忠貞
九年冒二十四日以舊卿本校合了 通邦
寛政六年寅六月廿日 類聚日本紀一校合了 通故
文政八酉十七日一校訖畢

第三十七
安永二年十月冒校餘了 忠貞
九年冒二十四日校了 通邦

第三十八
安永二年十月五日校定終 忠貞
九年冒二十四日校了 通邦

第三十九
安永二年十月八日以福昌意法眼慶長年中所寫之本校合 忠貞
九年冒二十四日校了 通邦
寛政六年甲寅七月一日 類聚日本紀一校合了 通故
文政八年酉冒十七日一校訖畢

第四十

安永二年十月十日以堀昌意法眼之慶長古本校讎系 忠貞
九年冒二十五日校了 通邦

第四十一
寶曆十三年九月九日以類聚日本紀校合了 亂相
安永九年四月二十五日校了 慶長古本脫 通邦

第四十二
安永九年冒二十五日校了但此本慶長古本脫也 通邦
寛政六年寅七月廿日 類聚日本紀一校合了 通故
文政八酉四月校訖畢

第四十三
安永九年四月二十五日一校了 慶長古本脫 通邦
无

第四十四
安永九年四月二十六日校了 講本脫 通邦

第四十五
安永九年冒二十六日以神村舊卿本校了即吾師所校本也 通邦
寛政六甲寅七月廿三日 類聚日本紀一校合了 通故

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』 請求記号 858-89
ガラス使用

文政八年酉四月廿日御本一校訂畢　通故

第四十六

安永二年十月廿三日以堀昌意法眼慶長中古本校讎終

九年四月二十七日校了　忠貞　通邦

文政八酉四月廿日校訂畢

第四十七

安永二年十月十三日以堀昌意法眼慶長中古本校讎終

九年四月二十七日一校了　忠貞　通邦

寛政六年甲寅八月三日類聚日本紀一校合了　通故

文政八酉四月廿日御本校合訂畢

第四十八

安永二年十月四日校合　忠貞

九年四月二十七日校了　通邦

第四十九

安永二年十月十七日夜以昌意法眼之慶長年中古本校讎終　忠貞　通邦

九年四月二十七日以舊卿本校訂畢　通邦

寛政六甲寅仲秋十日類聚日本紀校合了　通故

文政八酉四月廿一日一校畢

寶曆十三歳我師神村岐峰先生以

大納言源公所撰之類聚日本紀校合　忠貞

更以堀昌意法眼古寫本校讎終其奥書云

慶長十五年胃拜借菊亭右大臣家御藏本書功終云云

安永二年十月十九日　神村信九郎源忠貞

吾友忠貞字舊卿傳吾子神村子之遺書更校堀氏舊本

也今茲請而校之私本更加異見畢

安永九年四月二十七日　稲葉通邦

寛政六年甲寅八月十七日校合畢

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89

ガラス使用

敬公御本類聚日本紀依 命校合畢 通故

文政八酉四月廿一日御本校訂畢 通故

道直蔵書ヲ乞ヒ且ツ丹波ノ校合ヲ乞フ 通邦乃

蔵書ヲ以テ丹波ノ校合ヲ乞フ 本ヲ奥書諸

家ノ未ダ曾テ通邦ノ跋ヲ加ヘザルヲ以テ 通故

依 命通邦ノ子通故再ビ校合ヲ乞ヒ且ツ跋ヲ

道直故ヲ以テ通邦ノ門人吉田秀雄ヲシテ請ヒ

受ケシム

源敬公沸揆ノ類聚日本紀ノ序文ヲ奉

類聚日本紀 百七十巻 神代系図一巻 帝王系図二巻 合百七十四巻 寛成七十冊

源敬公御撰

改芳武切 音循也 撫作撫

徽

類聚日本紀序 忠陳云此御序文汲古堂ノ本ニ誤脱甚多シ今稿ニ御本ヲ以テ且御系ノモ宣ス御本八行十六字欄界アリ

大凡世之珠璣瓊琦昭華之器豈出之玉甕朱之金紫貝蒼璧青

銭自錬乃至服飾之具玩好之物為寶為珍者衆矣一無若書書

貽于先王之徽猷傳于往聖之微言可以治人可以脩己翊業守成之道大殲寇敵攻伐之術莫不備於

茲矣豈不至珍而洪寶也耶而書之為物難聚易散也或係兵革

之厄或罹祝融之燹或暴客鄙夫之粗俗或愚孫癡兒之冥頑不

用讀誦則取作帳嚢或名為好之而實不愛之則束之高閣而

為蠹蠹魚之窠或復偶有藏罕見之書稽難得之策之家亦知

以秘惜為藏不知以傳布為稽則箱篋縹帙之中自有二矛盾之秦

劫竟隆一已之手不上萬衆之眼因以殘滅者遂遂皆然也夫然

曷獨嘆倉鼠可碌碌祖龍可屠乎哉君子固不能無再思焉烏虖

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』 請求記号 858-89

ガラス使用

吾邦神造之域靈化之區處二天原一而開物居地界一以成務一俾
皇孫辨白黑一而定二尊卑一寶祚與二天壤一共無窮一故烈聖儀觀之美典
章文物之盛度越萬國莫之與京然神世玄古之記尚矣自磐余
橿之帝水間城之王也博物之旦明哲之佐代不レ乏二人一不レ乏レ
極始置二史官一掌二邦國之事一達二四方之志一而又豐聰馬子撰之千前
舍人安滿述之于後爾來修史者接レ武而不レ息且嘗家之類史卷
聯貳伯勝室之績録積盈伍拾一千之成業已如斯矣方方之
國語人人之家乘度其為レ書之多也何翅汗牛充棟哉不幸壹從
遭蝦夷之燔燼經二災歷一難復若干回一暨二于今日一牒試簡脫所謂存
十一於千百可レ謂二鈔之不一敏慕河間於二是獻一欽秉手於為レ善
嗜二好經書一收二斂篇籍一累歲積月至二數千卷一慨然以為今而不レ裝飾
則將來又益二燥爛一乃纂二日本書紀續紀後紀實録之書一上起二神代一
下止二光孝一編以次之類以分之兼二考六國之舊事記及野史
小說雜録群書遺漏其異者各自分註一事之下一以資二披閱一又著二神
代系圖一卷帝王系圖三卷附載二諸家一凡一百七十四題曰二類
聚日本紀一庶其與二天下後世一公之俱二其幸一方一也不レ必藏二於己
力思二其不一出於身一也不レ必為二己人一能識以寶此書則富有レ
其於世之珍軒輊清渾亦何如也吁是為レ序

正保二年十月日　從二位行權大納言源朝臣義直撰

近松茂矩の昔咄後編ょ云
源敬公御撰書のうち類聚日本紀を六國史の枝葉のやうなる
もの故由深田正室武野安齋前編十竹仲安齋後編八堀勘人等
と阪

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

天野信景ノ塩尾ノ云類衆日本紀ノコトヲ
敬公諸儒ヲ命テ令一ツ梓ニ上ヨト云ヲ
序ヲ初テ一ツ梓ニ上ヨト意ヲ一ツ
ヘキニ非ヤ

近藤守重ノ佚本日記附録ノ云

一冊實録　三條右府言　一冊

梅ノ賜記前ニ見エ又云慶長十九年冬北ノ
大御所仰曰公家中ニ流布ノ記録諸書寫
可ラシト云ヘリ実ニ西三條所持ノ言ヲ見ヨ（本光見前）
木四巻按ニ伊賀守ハ北書佑三條敷ノ代実隆ノ
文徳実録ヲ御前ニ告ル人ト云ヘリ又云慶長十九年冬北ノ
兩條奏ヲ以テ佚本ヲ上ラセテ然合ヲ乞

○三

佚ノ由即チ其ヲ見ルニ
未ダ書ニシテ安貞天福ノ号書アリ正和ノ上ト記筆ノ異ナル
元筆豊至徳貞治筆ニ非ス筆跡筆歌ノ題等ノ又永享ノ年ハ
字ヲ書ハ西三條實隆ノ筆ニ其家ニ伝ハル其名
ヲ書キシト記ス仍テ實隆ノ筆ニ非ス吉田ヲ云ヘル
侍官ヲ云ヘルナリ吉田家ニテ筆ヲ蓋
ノ字ノ筆ニ似タリ子筆ニ非ス筆歌ヲ現ニ又
一本ノ毎ニ毎ニ其ノ筆ヲ仮ヲ本ニ来ニ
道遠院大永三正八日於書写新姓下着了道遠野ヲ大永
二十九當書宿直　禁中於炉下終一巻功了已及深更
者也第二ノ末ニ付一考於大坂紛失了仍以在兵衛佐筆
長秋卿書寫之慶長七年初秋二日申ニ終ヲ慶長元年

有考旧記之事於姫下関之丹山陵七条之傍
七条仮寓七年而薨 氏和現存柱二本 普通
事再按駿記文慶長十九年九月七日今日舟橋秀賢
死去縁自由使舟橋大炊助清季秀相参著為遺
拘三代実録五十巻脱之内十巻名之とあり其余四
五十巻 合本八本
自ら別本ありて今もそなはるもの
道直云三代実録刻本一校ありて別校ありと
本也初山岡四郎兵衛後 鳥丸通下立売町
野田庄右衛門 開校と書林の名あり
道直翁ある事此書 河村秀穎之為書写
河村寛斎の

為書印方印巻首と巻末とあり秀穎の兄秀興延享二年丑年
十月以吉見幸軒先生蔵書校之加朱字畢 河秀興と
巻末ある事也朱墨ともに記あり此人の自筆歟
第一 奥書之事
安永八年己亥九月始業 久老同年十月夜再讀
第二 文化十四年丁丑六月二旬讀 加藤清敬子
五月十日より久老川十日の再讀 久老
第三 文化十四年丁丑六月二旬讀
五月十日より久老川廿日再讀 加藤清
第四 文化十四年丁丑六月二旬讀
五月廿日より久老川廿一日再讀 加藤清
第五 文化十四年丁丑六月二旬讀
十月廿三日再讀 加藤清
第六 十月廿四日再讀了 久老
第七 青十六日より久老川 久老
第八 奥書畢

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』 請求記号 858-89
ガラス使用

第九　文化十四年丁丑六月晋旬讀
第十　五月六日より七月六日旬讀　加藤肅
第十一　文化十四年丁丑六月晋於梅樹軒旬讀尾張加藤肅
第十二　五月十九日より六月四日旬讀　加藤肅
第十三　五月廿七日讀畢　久老　文化十四年丁丑夏六月四日旬讀
第十四　五月廿七日より　久老
文化十四年丁丑六月晋　加藤肅
第十五　青木四郎より　久老
第十六　青木四郎より　久老
第十七　青木四郎より　久老
第十八　奥書有
第十九　同
第二十　六月三日より　久老
第二十一　六月三日より　久老
第二十二　奥書有
六月三日校訂了
第二十三　久老
文化十四年丁丑夏六月七日讀畢

第二十四　文化十四年丁丑六月七日旬讀
第二十五　文化十四年晩夏七日旬讀
第二十六　六月四日校訂畢　久老　文化十四年丁丑六月七日旬讀　加藤肅
第二十七　文化十四年晩夏七日旬讀　加藤肅
第二十八　奥書有
第二十九　文化十四年丁丑六月七日旬讀
第三十　六月七日より　久老
第三十一　文化十四年晩夏七日　久老
第三十二　六月八日より校訂了　久老
第三十三　文化十四年丁丑晩夏八日　久老
第三十四　六月九日校訂畢　久老
第三十五　七月二日校訂了
第三十六　七月二日校訂了　久老
第三十七　七月二日校訂了　久老
第三十八　七月十六日校訂了　久老
第三十九　七月十六日より　久老
第四十　奥書有

文化十四年晩夏八日旬讀　加藤肅　加藤肅
文化十四年丁丑六月八日旬讀加藤肅
文化十四年丁丑六月八日旬讀加藤肅
文化十四年丁丑六月八日於梅樹軒　加藤肅
文化十四年丁丑晩夏九日於梅樹軒旬讀了　肅

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用

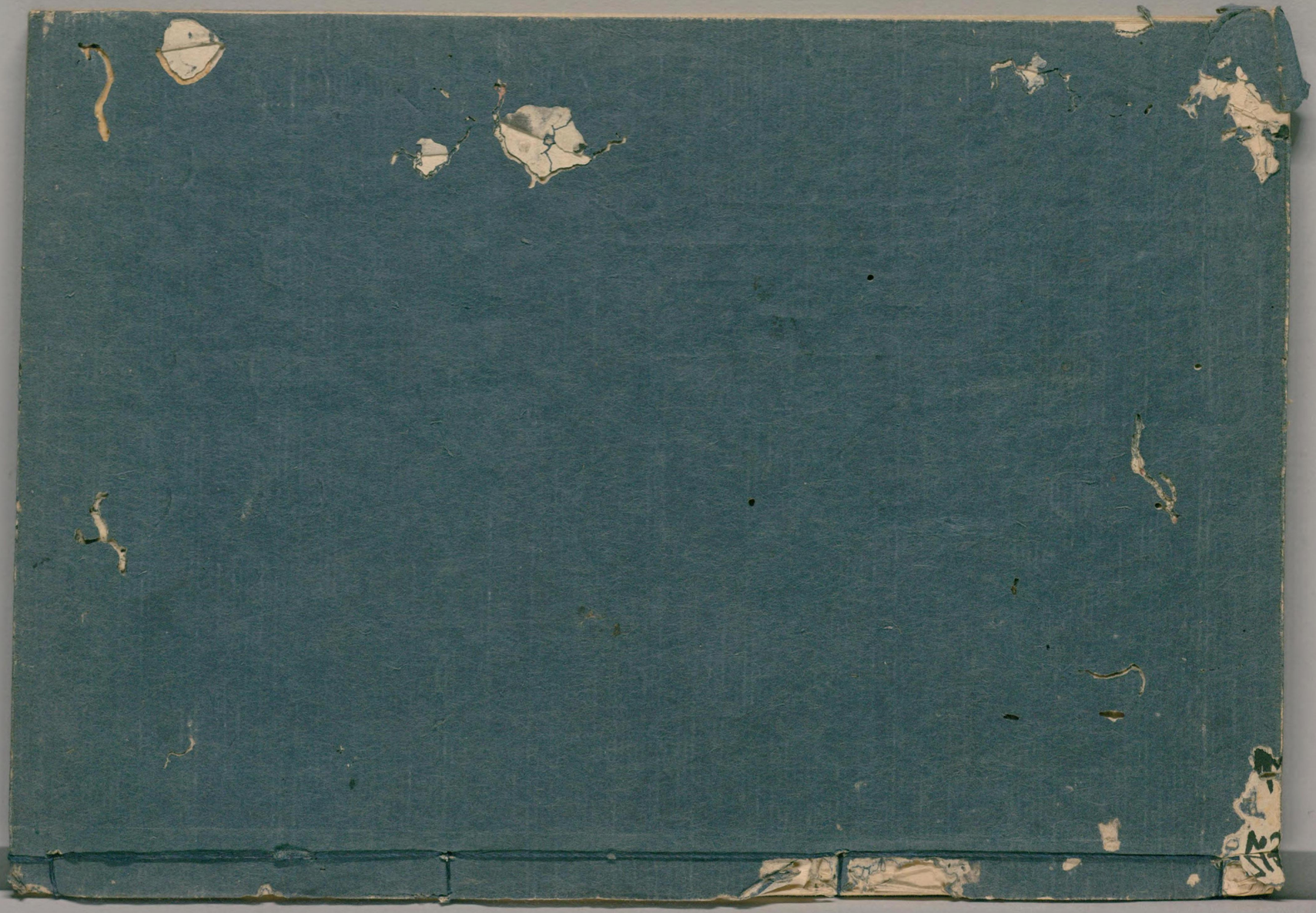
第卌一　七月十七日校　　　

858
89

右六國史撮記野口道直所手録也道直好古書所藏甚多欲盡為之記而未成此其第一卷云嘉永壬子春余借而寫之自記之尾如此

要齋陳

国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』　請求記号 858-89
ガラス使用



ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『汲古堂蔵書目六国史』請求記号 858-89